

記念講演会

テーマ：国土強靱化 海を渡る！

講師：自由民主党総務会長 二階俊博 先生



日中友好から見る外交のかたち

先日、私は約3,000人の皆様と一緒に、中国を訪れました。その際、中国側から歓迎のご挨拶をいただいたのですが、なんと習近平主席が直々にいらっしゃいました。それはもう、人民大会堂中がどよめきました。中国は日本ほど政治についてオープンではありませんから、主席が姿を現すというのは非常に稀なこと。そんな方が日本国民の前に現れるということは、「お互いに仲良くしよう」というメッセージなんです。また挨拶でも、冒頭から「友あり遠方より来る。また楽しからずや」、つまり“日本から来られた皆さんは友だ。仲良くしよう”と言われました。さらに安倍仲麻呂から始まり、毛沢東、周恩来、鄧小平、田中角栄、大平正芳といった日中両国の指導者や、廖承志、高崎達之助、岡崎嘉平太に至るまで、古くより深い友情を結んできたことを述べられました。日本について詳しく勉強しているわけです。

この経験を通して、友好の輪を広げるためには、両国がお互いを理解し合わなくてはならないと改めて実感しました。また、習主席が日本に対して、公の場で理解を示されたということに意味があるので。習主席はスピーチの中で隣人は選べるが、隣国は選べない。「徳は孤にならず、必ず隣あり」。

本当に徳のある人は、孤立したり孤独であるということはないと述べられました。我々はこれからも歴史を忘れず、平和を希求し、次の世代にそれを引き継ぐ事が重要です。先人が植えた木で、後の世代が涼む。先輩たちの植えた木のおかげで、後世の人たちがその木陰を楽しむことができるのです。

後日、農林水産省の方が私のところへ訪ねて来ました。我々が日中交流の扉を開いたことで、途絶えていた日中間の農業関係の話し合いが進んだようで、そのお礼に来られました。我々の訪問が、国家間の新しい関係を築いたわけですから。このように、外交とは、あらゆる行動・言葉を一つひとつ積み重ねた集大成であると思います。

東日本大震災で思い知った国土強靱化の必要性

自由民主党は野党の時、全国一斉街頭演説を行いました。私は紀伊半島エリアを担当したのですが、ちょうどこの時、紀伊半島に地震・津波警報が出されていました。災害対策として、各市役所には消防団などの関係者、県庁には県知事が控えていましたが、一般の方々にはあまり情報が伝わっていませんでした。そのため、私は街宣車の上から「今日は津波が来るそうです。演説はごく短くするので、早く逃げる準備をしてください」と訴えました。しかし演説後、周囲の人に今からどうするのか聞くと、「映画を観に行こうと思う」と言う。別の人も、「友達の家へ遊びに行く」と。いくら「災害が来るから逃げろ!」と言っても、逃げる気配が全くないんです。このままでは、もし日本が災害に襲われたら全滅してしまう、これは大変なことになるぞ、と危機感を覚えました。こうして、私は翌日、数人の議員を集めて、

災害対策に向け準備を始めたのです。

ほどなくして法案ができ上がり、さっそく法律を立ち上げようとした。しかし当時、我々は野党です。300人以上いる与党に対して、100人程度しかいません。なかなか賛成が得られず、法案は長く頓挫しました。それでも、災害で危険な状態が押し寄せてくると分かっているが、何の法的な準備もせず、国民の皆様に「逃げてください」と呼びかけられないなどということは、後世許されることではありません。延々と反対され続ける中で、粘り強く活動を続けました。そんな折のことです。3.11、東日本大震災がやって来ました。これではもう、反対意見の述べようもないでしょう。「そんなこと必要ない」なんて言われていられない。災害の恐ろしさを目の当たりにした結果、全員賛成で法案は可決されました。3.11が来る前に賛成してくれていれば、どれだけの人が助かったか。どれだけの対応ができたか。本当に悔しい思いをしましたが、今はもう前を向くしかありません。

自然災害の脅威に地球規模で取り組むために

11月5日。この日は『稲むらの火』といって、安政元年和歌山県広川町で大きな津波があった時に、地域の庄屋さんが山の上にある自分の稲むらに火を放ち、「こっちに逃げろ」と人々の目印にした日です。後で地域一帯を見ると、津波で家も田んぼも跡形もなく流されていた、という。地域の人々は、庄屋さんの火のおかげで自分達が助かったと言って田んぼにひれ伏し、感謝したそうです。私たちは災害対策の第一歩として、この11月5日を『津波防災の日』に制定しました。

本年3月に仙台で『国連防災世界会議』が開催され、世界各国から大勢の方々が来日してくれました。そこで、私は各国の代表に「日本の『津波防災の日』

を、『世界津波防災の日』にしたい」と協力を仰ぎました。というのも、例えばインドネシアは、以前、災害で約20万人の方が亡くなった。「災害と言えば我が国ですよ」と言われると、こちらは何も言えません。そこで前もってお願いしたところ、「分かりました、日本主導でやってください」と、各国から少しずつ了解をいただきました。また、先日行われた太平洋島サミットでも、島嶼国の方々から「『世界津波防災の日』に賛成します」というお声を頂戴しました。先にもお話しした通り、国同士の対話は、こまめなアピールと気配りの積み重ねです。それが実を結んだ結果と言っていいでしょう。今度の国連総会で各国の協力が得られれば、災害に対して世界で取り組むことができます。災害対策は、人類の英知を結集しなければ太刀打ちできません。世界規模、地球規模でやっていこう、というのが私たちの思いです。

災害に対して、堤防を築くことも大事です。命の道といわれる道路を建設することももちろん大事だ。しかし、何よりも大事なことは、一人でも多くの国民の皆様に理解していただいて、一緒になって取り組むこと。日本はもちろん、世界各国が立ち上がれば、必ず実を結ぶ時が来ると思います。私たちのかわいい子や孫の時代、災害に対して準備しないことには、いい親、いい祖父母にはなれません。「あの子たちを何とか救ってやろう」という気持ちで考えれば、いろんなことができるはず。国民の皆様には、どうか他人事にせず、自分たち、自分の子どもたちのためと受け止めて、『世界津波防災の日』の推進にご協力いただければと思います。

